

苦参

苦味健胃が通用しない苦味



東京薬科大学 客員教授／千葉大学 名誉教授 山崎 幹夫

Mikio Yamazaki



メ科のクララ(*Sophora flavescens*)は、初夏の頃、うす黄色く、小さくて可憐な蝶々が群がったような総状花をつける。シベリアから中国、朝鮮半島にかけて分布は広く、わが国でも各地の山野に自生するが、ゴルフコースのわき、斜面の松林の中などにひっそりと叢生する様子はむしろ地味で目立たない。1960年頃、東京の近郊、たとえば習志野のあたりには旧陸軍の演習地跡の原野や自然林がまだ残されていて、そこかしこにクララが自生していた。たまたま研究のためにクララの生の根を使う必要があって掘りに行ったところ、あっという間に抱えきれないほどの量を収穫した記憶がある。



根 は地中にまっすぐに伸び、かなり太く巨大化するが、見掛けほどには硬くなく、包丁でも輪切りにすることができる。噛むと恐ろしく苦い。適当な厚さに切って乾燥させた生薬を苦参と呼び、薬用に供する。いわば“苦い人参”であるが『神農本草經』には中品として収載され、味は苦、氣は寒であって、解熱、利水、温補に効ありとされている。



参の参が薬としての効能、あるいは紡錘の形をした根を意味することに由来して、苦い根の生薬に「苦参」の名がつけられたという説がある。しかし、漢和辞典には「参という文字は女性が髪に色々な飾りを煌びやかにつけた状態を表す」という記述があるし、一方で人参の参も同じ意味に由来するかと思えば、これは、もともとは「長い年月の間に成長して人の形をつくり、神を宿すことに由来して人漫の字があてられていたのだが、字画が煩雑であるという理由で漫が参に置きかえられた」という話もある。したがって、これらの説の真偽は曖昧である。植物の和名クララにも、舐めるとクラクラするほど苦いから眩草であるとか、あるいは苦辣に由来するという諸説がある。しかし、これらについても真偽のほどはわからない。



方の処方では「三物黄芩湯(金匱要略)」(苦参、地黄、黄芩)や「消風散(外科正宗)」(苦参、甘草、荊芥、牛蒡子、蝉退、胡麻、地黄、蒼朮、石膏、知母、当帰、木通、防風)、「苦参湯(金匱要略)」(苦参



などへの配合がみられる。いずれも清熱、燥湿、殺虫を期待して、手足のほてり、水虫、たむし、あせも、ただれ、痒みが強くて赤みのある湿疹などに用いられている。いずれにしても、配合目的や用途において、苦参はそれほど的重要性をもっていたとは考えにくい。

最 近での苦参の用途は、むしろ、黄連、黄柏、龍胆、当薬あるいはゲンチアナ根などとともに苦味健胃や止瀉を目的として家庭薬に配合される需要が多かったように思われる。ちなみに、苦参を配合した家庭薬は最近まで23品目もあった。また、約20年前の「医薬品製造指針(1981)」には、苦参、黄連、黄柏は第19表で第V欄第5項の苦味健胃・止瀉生薬に分類されている。

苦 味成分を含有する生薬への苦味健胃という薬効認識は漢方医学においては顕著でなく、どちらかといえば西欧からの生薬学によって伝えられた認識だったのではないだろうか。苦味は味覚を刺激することによって反射的に胃液の分泌を促進し、胃液の酸度を高め、胃の運動を亢進させる。そのた

め、食欲不振の際にも消化を良くし、食欲の増進に働くというのが教科書的認識である。大抵のヨーロッパの生薬学の教科書には、苦味質について独立した記述があり、ある教科書では「苦味は全ての民族の文化史において薬効の期待される成分として尊重され、好まれてきた」と述べている。ところが、苦参についての“漢方医学的効能”は前に述べた通りであり、苦味に対する薬効への特別な期待はない。

と ころで、これは1984年の「薬学雑誌」に発表したわれわれの研究結果であるが、苦参の抽出エキスを「水浸拘束ストレス」を与えたマウスにあらかじめ経口投与をしておくと、通常であればほぼ全例に発生する胃潰瘍を見事に抑制した(抑制率91%)。さらに、苦参の主成分であるオキシマトリノには顕著で用量依存的な胃酸分泌抑制作用と、ストレスによって惹起される胃運動の亢進に対する抑制作用があり、またオキシマトリノからN-オキシドがはずれた形のマトリノには酢酸ライシング(酢酸の刺激による痛みで腹をよじる反応)の抑制、ペントバルビタールによる睡眠時間の延長、体温の下降、メタンフェタミンによる運動亢進の抑制など、一連の中枢神経抑制様作用があることが認められた。ちなみに、経口投与されたオキシマトリノは代謝的にマトリノに変換された後に排出されることも判明した。

こ こで研究結果の詳細を述べることはできないが、興味深いことに、苦味健胃という“西欧医学的効能”は苦参の苦味には通用せず、むしろ、『神農本草經』の教える「肝胆氣を養い、五臓を安んじ、志を定め、精を益し、解熱、虫を殺す」という薬能に通じる近代薬理学的な実験結果が認められたということだけは言えそうに思われる。苦参には中枢神経を抑制し、胃酸の分泌を抑えて胸のつかえをおろす薬効が期待できそうだからである。

蛇 足のようだが、マトリノとオキシマトリノの毒性はこれまでにいわれるほどには強くなく、われわれは、マウスに対するLD₅₀値は経口投与で、マトリノが370mg/kg、オキシマトリノが587mg/kgという結果を得ている。